テンブルックのヴェーバー解釈をめぐる論争

高野晃兆

序

ヴェーバー研究においては一九六〇年に出版されたReinhard Bendixの"Max Weber, An Intellectual Portrait"が、ヴェーバーの業績全体をはじめて展望しえた標準的な解釈とみなされていた。これに対して、一九七五年、長年ヴェーバー研究に携わってきたF.H. Tenbruckが、挑戦的な形で„Das Werk Max Webers"[1]という論文を発表した。この論文はドイツのヴェーバー研究に一石を投じ、これに対する批判的論文がいくつか現われた。以下において、Tenbruckの問題提起、それに対する批判、を素描してみたい。

一、テンブルック論文

この論文の各節の主旨を紹介し、場合によってはそれが後の論旨の展開へのどういう前提であるかのコメントを添

えながら進んでいこう。

第一節　マックス・ヴェーバーの主著――解釈の一つの仮定　マリアンネ・ヴェーバーが一九二一年「経済と社会」（以下 WG と略す）を編集したとき、彼女はこの作品に das nachgelassene Hauptwerk Webers と名づけた。[2] 更にヨハネス・ヴインケルマンによる版においても das hinterlassene Hauptwerk という言葉が使われた。[3] そのために学界では長い間 WG が主著とみなされて来た。しかし実際には WG には一貫したテーマというものがない。複数のテーマと複数のテーゼが存在し、そしてどれもが網の結び目の一つの役割しかはたしていない。つまりどのテーマもテーゼも指導的な立場をとっていない。しかしヴェーバーの精神的情熱を考えるとき、彼がライフワークとして Nachschlagewerk〔便覧〕の様なものを作ったという様なことは考えられえないので、WG を主著とすることに無理があるのではなかろうか。

〔コメント〕後に「世界宗教の経済倫理」（以下 WEWR と略す）が主著であると主張するためにまず WG を主著とする見解が否定された。

第二節　宗教史上の呪術からの解放の過程　宗教社会学論文集（以下 GARS と略す）に収められている「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（以下 PE と略す）にみられる宗教史上の呪術からの解放過程に関する表現は一九〇四―五年の Archiv[4] に発表されたオリジナルの論文には存在しないのである。この論文は資本主義の精神の成立とピュリタニズムとの関係だけを本来問題にしているのであって、古代イスラエルの予言者にはじまって、ピュリタニズムで完結する宗教史上の呪術からの解放過程というのは明らかにこの論文の枠をはみ出ている。

〔コメント〕このことが、(1) Modernisierung と Entzauberung と Rationalisierung とは異った概念であるとい

うこと、(2) Entzauberung という概念は宗教社会学の Sachforschung が終った段階で発見されたこと、を主張する前提となる。

第三節　西洋の合理化と宗教史上の呪術からの解放　ヴェーバーの研究は Rationalisierungsprozeß（〔西洋の〕合理化過程）という表現によってテーマ化されるが、「彼自身はこの表現をほとんど使わないで、むしろ Rationalität Zweckrationalität Entzauberung といった様な一般的な概念を交互に使っているのがみられる」(S. 669 Mitte)。「ここでとくに Rationalisierungsprozeß と Entzauberungsprozeß とが交換しうる概念かどうかという問いが提起される。これらは交換しうる概念であるという不動の仮定がこれまで解釈者によってなされている。反対の仮定がいずれにしても議論されたことがなかった。けれども事実はヴェーバーは宗教史上の呪術からの解放と西洋の合理化とを分離している」(S. 669, Mitte)。

まず、PE の段階では、ヴェーバーの関心は合理化過程の後の段階、つまり資本主義に制限されている。その後ようやくそれ以前の段階へはいっていく。ところで宗教史上の呪術からの解放過程は、古代ユダヤ教にはじまってプロテスタンティズムの倫理に終るのであるから、西洋の合理化過程全体の一部である。従って Rationalisierungsprozeß の認識は Entzauberungsprozeß を認識して後のことである。

従ってヴェーバーがそのつど考えている内容を適切に表現するために、西洋の合理化過程全体を Rationalisierungsprozeß これに対してプロテスタンティズムまでの発展を Entzauberungsprozeß 最後は Entzauberungsprozeß の濃縮された部分と継続を Modernisierung と規定するのがよい。

Entzauberungsprozeß を何時何処で認識したかということがヴェーバー社会学の中心問題となる。何となればヴ

ェーバーはピュリタニズムと古代ユダヤ教を研究しただけで Entzauberungsprozeß という着想を獲得したのであるから。

第四節　合理化のテーゼ　合理化（或いは合理化過程）のテーゼとは、「西洋の合理化過程を nachzeichnen すること」がヴェーバーのライフワークをつらぬく課題であった、という Bendix のテーゼのことである。

Bendix は前掲書において、「本書の研究は、ヴェーバーの方法論的著作よりもむしろ経験科学的著作に力点をおいて、彼の労作にアプローチする」(S. 20 訳7頁) という基本命題をかかげてヴェーバー解釈の決定的な方向転換を行った。ヴェーバー解釈はそれまで彼の方法論的並びに理論的研究にウェイトを置いて行なわれて来たが、ヴェーバーの研究上の成果と彼がいだいていた関心事とはとりわけ Sachforschung に求められなければならない、ということを明らかにした。そしてその際合理化過程がテーマ的な核とみなされた。「合理化過程を私はヴェーバーのライフワークをつらぬく糸とみなすのである」[5]

この合理化過程というテーゼを Tenbruck は批判する。「Bendix はこの過程を再構成することを企画した。彼は特に Porträt には成功したが、合理化過程の再構成には非常に制限された範囲でしか成功していない」(S. 672, o.)。ヴェーバーが西洋の合理化過程を nachzeichnen する計画を持っていたと言われるが、実際には、古代ユダヤ教からプロテスタンティズムの倫理までとんでいるのである。この空白のところを Bendix は WG のいくつかの章を Station として埋めようとして試みている。Bendix は WG を WEWR の後に起草されたものと解している。出版の日付は確にそうであるが、原「経済と社会」は WEWR よりも以前に起草されたもの（一九一一―一三）であるから[6]、その様な解釈はなりたちえない。「合理化のテーゼは、WEWR は WG の前に書かれたという Bendix の書物に一

貫してみられる仮説と共に立ち、それ故共に倒れる」(S. 673, o)。

Bendix は西洋の合理化過程をさまざまな個々の出来事のからみ合いとして解釈しなければならないと考えているが、それに対して、Tenbruck の解釈は、「合理化は、歴史的不安定性にもかかわらず、宗教的理念の合理化への止めがたい衝動のうちにおかれたところの内的論理の Zwang によって荷われたという認識のうちにヴェーバーの決定的な発見があった。それ故合理化過程は根本的には宗教史上の呪術からの解放なのである。合理化過程の契機と Station は宗教史上の呪術からの解放から統一性を与えられるのである。部分的な出来事を歴史的に同一視することではなくて、部分的な出来事の内的な強い連関がヴェーバーの問題を解く方向を規定するのである」(S. 675, o)。

〔コメント〕Rationalisierungsprozeß という Bendix のテーゼが否定された。それに対して Entzauberungsprozeß という Tenbruck のテーゼの主張が始る。このテーゼにおいて、ヴェーバーは WEWR の Sachforschung を終えた段階で、Entzauberungsprozeß を現象として把握したのではなく、現象の背後に、宗教的理念のもつ内的論理の Zwang として認識したと主張されるのである。

第五節　世界宗教の経済倫理　ヴェーバー業績中におけるその位置　「WERW はヴェーバーの業績の解明において長い間決して重要な役を演じなかった。学問論や基本諸概念に関心が集中されていたかぎり、WEWR は臨時の特殊研究とみなされざるをえなかったしまた多くの人たちには的はずれな対象への厭うべき浪費とみなされた。PE に関心が持たれた場合でさえも、WEWR の存在については口にされなかったことがしばしばあるし、或いは WEWR は PE に対する方法的再吟味とみなされ、オリジナルなテーマを示すことのできないものとみなされた」(S. 675, u.)。

Bendix においては Rationalisierungsprozeß のテーゼによって WEWR のうち「古代ユダヤ教」だけが重要視される。これでは WEWR の特性と位置とが根本的に誤解されている。「何となればこの研究はヴェーバーの業績の中で特別な、いや事実唯一無二の地位を占めている。まず WEWR は WG と違って委託された仕事ではなく、それ故ヴェーバーはここでは自由に自分の問題を追求することができたから。次に、WEWR は人生に関しても仕事に関しても最も展望のきく年令のものである。WG のあとに起草されたので、WEWR は大いなる Sachforschung の最後のものとみなされ、そしてそれ故最後の認識の立場とみなされなければならない」(S. 676, o.)。

多年の研究の後、中国、インド並びにイスラエルについての章が暫定的な草稿にまとめられたとき、戦争が勃発した。戦争が終った後には再びこの仕事にかえることができないと確信していたので、Archiv にシリーズの形で発表することに決心した。[7] 彼は今やあわただしく三つの特別研究のトルソーから普遍的な結論をひきだした。これが WEWR の「序論」なのである。これはやや急ぎすぎたので、「中間考察」においてもう一度手直しをする。

それでは WEWR のテーマは何であったのか。「PE を GARS に収録するに当って手を加えた時に、ヴェーバーは最後の脚注で PE を書き終えるにあたってたてたプログラムに『当時』とりくまなかった理由を説明している。[8] しかもそれは偶然の理由〔トレルチが Die Soziallehren を書いたこと〕と並んで『文化発展の総体のなかに位置せしめる』という希望であった。それ故 PE のテーマ、つまり資本主義の精神が禁欲という宗教的理念のなかで制約をうけているということが今や大きな規模のなかへ投影されまた普遍化されたのである。理念と利害関心（或いはヴェーバーにとっては同じことになるが、宗教と社会）の長期にわたる発展に対する役割はどの様なものであるか。……合理性は理念と利害関心の合同劇においてどの様に効果を現わすかというはるかに普遍的な問いが論じられたのであ

った」(S. 677)。

キリスト教についての章を書かずして、どうして呪術からの解放過程という言葉を口にすることができたか。「ヴェーバーが合理性の発展についての彼の研究の結論を比較論的にひきだしたところでのみ、彼に知られた普遍的事実からヨーロッパの発展に対して確信をもってかかる過程を診断することを彼に許したところの普遍的な洞察を得ることができたのである」(S. 679, o)。つまり「その際彼には予期せざるかっこうで、いろいろな資料から合理性は利害関心と理念の間でどの様に発展するかという問いに対する一般的な答えがひきだされた。しかも、宗教的な合理化がとるそのつどの方向は社会的な諸条件に左右されるけれども、長期にわたる合理化過程は宗教的な基盤の上で実ることになるという(更に拡張さるべき)結論に達した。この普遍的な洞察が〔キリスト教の章を書かずして〕西洋の発展において宗教史上の呪術からの解放過程を認識することを彼に許したのであった」(S. 679, Mitte)。

第六節　普遍史と合理性　批判者たちによって以上までの節が werkgeschichtliche Hypothese〔研究の順序・思想発展に関する仮説〕と呼ばれ、この節で主張される内容が systhematische These と呼ばれる。しかしこの節の内容はこれまでの節においてもところどころで先取りされて述べられている。

「一九世紀は宗教の起源と発展に関する問題においては二つの派に分れた。一方の派にとっては、宗教は認識という面からみると人間性の大いなる堕落であった。つまり人は背後の世界の力や存在を考えることによって現実から逃避した。……こういう見解をとったのは急進主義者たちであった」(S. 682, u)。それに対して漸進主義者たちは宗教を認識と合理性に対して理解を示した〔学問の〕先駆者とみるのである。ところで「宗教はむしろ固有の問題性に基づいて進んでいくとみなすヴェーバーは全く違っている。つまり宗教の根底にあるものは、……ヴェーバーがて

っとりばやく Theodizee の問題と呼んだところのもの、それ故いずれにせよ、現実性の認識的研究とは関わらない問題である。宗教を合理性へとかりたてる力は、Theodizee の問題に対して合理的な答えを得るという欲求から生じるのである。宗教的な発展の諸段階とはこの問題並びにその解決の明快化によって表わされる」(S.683, o)。従って Tenbruck の解釈では宗教は固有の問題性と固有の論理に従って発展するのである。それ故「ヴェーバーの場合にはその固有の論理をもった宗教的合理化は Prioritätを主張する。それ故われわれがてっとりばやく合理性と呼んでいるものが宗教の合理化の条件の下で発展する」(S. 683, Mitte)。従って「序論」のなかの有名な表現「人間の行為を直接に支配するものは、利害関心(物質的ならびに観念的な)であって、理念ではない。しかし『理念』によってつくりだされた『世界像』は、きわめてしばしば転轍手として軌道を決定し、そしてその軌道の上を利害のダイナミックスが人間の行為を推し進めてきたのである」(GARS I, S. 252. 大塚・生松訳五八頁)[9]を引用したあと、Tenbruck の解釈が続く。「人間の行為は直接利害関心によってかりたてられるという事実にもかかわらず、歴史においては、その方向が『理念』によって規定される長期にわたる経過がみいだされる。その結果歴史においては、ある程度まで、人間は自分の利害関心のためにあくせくと働いていながら、長い目でみれば、歴史の水を専ら理念の水車へ導き、自分の行為に関して理念の呪縛のなかに留まっている」(S. 684, u.)。これをもっと先鋭化したのが次の表現である。「理念の慣性がではなくて、理念の固有の論理の Dynamik が理念を歴史の転轍手とするのである。諸理念は固有の論理の強制の下で合理性という帰結に至る。そしてそのことによって〔西洋近代という〕普遍史的な結果を生んだのである——これが WEWR の成果である」(S. 685, u.)。

Tenbruck の右の表現は、宗教の固有の問題性と固有の論理によって古代ユダヤ教から西洋近代に必然的に至った、

と解せられる。事実、彼は次の様に述べる。「提示された主要なひもはヴェーバーの場合には宗教的な合理化の多数の枝のある『系統樹』のなかの一つの線にすぎない。《decision tree》におけるように、宗教の合理化はいくつかの小道で行なわれうる。このうちのあるいくつかは袋小路であり、他のいくつかは先へ進んでいき、そして普遍史的な成果を挙げている。ある社会がどういう道をとって進むか、或いはある社会がある点に立ち留るかどうかは諸状況に依存している。けれども選択によっては〔ひとたび袋小路へはいってしまえば〕、そのあとの選択いかんにかかわらず、後に達しうる点が決まる。そのかぎりで『系統樹』は宗教の合理化という固有の論理と理念による転轍を描き出すのである」(S. 687 f.)。「それ故宗教的合理化の固有の論理は、潜在的にはユダヤ教の倫理のうちにあり、そして世俗内的禁欲において現実となったところのあの理念の展開に協力したのであった」(S. 690, Mitte)。

それ故、Tenbruck の systhematische These を簡単にまとめると次の様になるであろう。宗教の固有の問題性と固有の論理が文化発展の基礎となる。そして古代ユダヤ教の選んだ道（と他にいくつかの道だけ）が合理化へと必然的に至る道であり、その他の道は永久に合理化はとざされているのである。それ故歴史の流れを決定したものは宗教である。

二、テンブルックに対する批判

以上の Tenbruck 論文に対する批判が現われた。まず一九七八年に W. Schluchter[10] 一九七九年に Kalberg[11] 一九八〇年に J. Winckelmann[12] と M. Riesebrodt[13] である。Schluchter は自分の論文の中の一部で、Kalberg は短い論

評においてとりあげた。本格的に対決しているのが Winckelmann と Riesebrodt である。八十歳の Winckelmann のは長編の労作である。Riesebrodt のは要領よくまとめられたものである。

A　シュルフターの批判

Schluchter は、まず werkgeschichtliche Hypothese を問題とする。これに基づいて systhematische These が主張されているからである。werkgeschichtliche Hypothese では (1)WG と WEWR の成立史並びにそれら相互の関係 (2)「序論」と「中間考察」の Datierung が問題とされる。Tenbruck は systhematische These を werkgeschichtliche Hypothese によって支えるために次の様な Datierung を構成しなければならない。(1)WEWR は WG の後に起草された。(2)「序論」と「中間考察」は宗教社会学の Sachforschung の後に書かれた。(3)ヴェーバーはこの総括をしたのちに、「イスラムとキリスト教の章の計画」を中止した。これに対する Schluchter の反論は、(1)WG と WEWR との間には、zeitlich な、また sachlich な順序というものはなく、むしろ互に補いあうという関係があるだけである。ヴェーバーは一九一〇年から一九二〇年にかけて WG と WEWR に継続的にまた交代的に従事していた。(2) WG と WEWR の間のみならず、これら二つと「序論」並びに「中間考察」の間には zeitlich な並びに sachlich な順序が存するというよりはむしろ互いに補いあうという関係が存するだけである。[14] zeitlich な順序をつけるために、Tenbruck は「序論」と「中間考察」をできるかぎり遅く Datierung しなければならない。従ってこれらが一九一五年にやっと書かれたということになる。少くとも「序論」はヴェーバー自身の言葉によれば一九一三年に出来ていた（「序論」に付せられた脚注参照。この確認は一九二〇年の GARS に収められるときにもくりかえされている）。また WG の宗教社会学のなかに「中間考察」の別稿が見出されるのは周知のところである (Paragraph

11)。また Entzauberung の概念は一九一三年の Logos 論文[15]並びに「儒教と道教」の結論の最初の稿 (Archir に発表された稿)[16]にもすでに使用されている。これらのことは Tenbruck が考えているよりももっと以前に Entzauberungsprozeß を認識していたということを示している。(3)ヴェーバーは WEWR についての研究をイスラムとキリスト教についても拡大しようとしていた。このことを示すのは一九一九年秋のヴェーバーの手紙であるが、[17]この手紙からマリアンネ・ヴェーバーが一九二〇年十月に GARS の第三巻の Vorwort でほのめかしていること、つまりヴェーバーにとっては西洋の合理化の叙述は初期キリスト教やイスラムの分析なくしては結局は不完全であったということ、が真実らしいのである。[18]「このことは西洋と近東の文化発展におけるユダヤ教の位置に対するヴェーバーの序論的説明からも内容的に明らかにされる。ユダヤ教は歴史的意義の点で『ギリシヤの精神文化の発展、そして西洋に限っていえば、ローマ法の発展、ローマの官職概念にもとづくローマ教会の発展、それからさらに中世的・身分的秩序の発展、そして最後にその秩序を破砕しつつ、しかもその諸制度を継承発展させてゆく諸えいきようの流れ、これを宗教の領域でいえばほかならぬプロテスタンティズムの発展だけが対等に並べられうる』一『主要点』とみなされる (GARS Ⅲ, S.7 内田訳八頁)。この主要点はそれ故唯一の『初め』でもなければ『終り』を含んでいるのでもない。この主要点は西洋の発展を規定するいくつかの構成的諸条件の一つなのである。他の諸条件が更に加わらなければならない。例えば宗教の領域ではイエスの説教、パウロの伝道等々」(S. 460)。

systhematische These に対する批判は、(1) Riesebrodt の方がよりまとまっているのと、(2) Schluchter 自身のヴェーバー解釈に筆者の同調できないところ〔社会進化論的色彩を帯びること〕があるので、Riesebrodt の批判に耳を傾けることにしたい。[19]

B　リーゼブロットの批判

Riesebrodt も Tenbruck の論文を werkgeschichtliche Hypothese と systhemrtische These に分かち、前者の批判からはいる。彼は Tenbruck の Hypothese を次の様にまとめる。

Tenbruck はヴェーバーの研究活動を三つの段階にわける。一八八九―一九〇三年の第一段階。一九〇四―一九一四年の第二段階。一九一五―一九二〇年の第三段階に区分する。「ヴェーバーは『methodisch には客観性論文をもって、sachlich には PE をもって、彼固有の社会学へ』(Tenbruck, S. 670f) 進んでいった。けれども普遍的な合理化の理論をヴェーバーは当時まだもっていなかった。彼は宗教社会学研究（一九一一―一九一三）を終結したときにはじめて、彼は普遍的な合理化の理論を表現しえた。このことを彼は WEWR において行った。手始めとして『序論』において、特に『中間考察』において行った。一方宗教社会学的 Sachforschung はこういう構想をもっていなかったし、それに平行的にとりくまれた『経済と社会』の宗教社会学の章もこういう構想をもっていなかった。ヴェーバーの『後期社会学』は『序論』でもって始る」(S. 113, u.)。

Riesebrodt によれば、ヴェーバーの研究史はもはや論争の対象にはならない。「序論」及び「中間考察」の Datierung に関する、Entzauberunsprozeß の発見に関する、また WG と WEWR の関係に関する Riesebrodt の見解は Schluchter とほぼ同じであるので省略する。

Riesebrodt によれば、Tenbruck の systhematische These は werkgeschichtliche Hypothese が倒れれば、倒れてしまう構成になっているが、これまで一見自明と思われていたことを問題にしているので、新しい問題提起に目を向けるという意味での生産性をもつ可能性があるであろう。

Tenbruck はヴェーバーの後期社会学は「理念と利害関心の長期にわたる発展に対する役割はどの様なものであるか」という問いを普遍史的な視野で考察することであって、西洋の合理化過程の認識ではない、と主張するのに対して、Riesebrodt は WEWR においても西洋の合理化過程の認識であるとする。この主張を裏づけるために、GARS の「序言」(Vorbemerkung) にみられるヴェーバー自身の言葉を引用している。ヴェーバーはプロテスタンティズムの論文をその意図において性格づけたのちに、次の様に続けている。「その後につづく WEWR に関する諸論文では、もっとも重要な文化諸宗教とその環境をなす経済および社会層分化との関係を見渡しながら、つぎに分析されるべき西洋における発展との比較のための問題点を見つけ出す。……それ故、これらの諸論文では、……文化の包括的分析だなどというつもりはない。むしろそれぞれの文化領域について、過去にせよ現在にせよ、西洋の文化発展とは対照的であるようなものが故意に強調されている。……」(GARS I, S. 12～13 大塚・生松訳二四頁。傍点ヴェーバーによる)。

Riesebrodt は Tenbruck のいう後期社会学の中心的なテーゼとして先に引用された「序論」のなかの有名な表現[20]に対する Tenbruck の解釈を引用して、「Tenbruck はヴェーバーの概念と概念複合体とをとり違えているのが目につく。ヴェーバーは『世界像』に一種の転轍手の機能を与えた。それに対して Tenbruck の場合にはここの連関では『理念』が問題になっている。そしてこの理念を彼は他の場所では宗教の同義語として定義している（本論文八二頁参照)。ヴェーバーは『利害関心の Dynamik』という言葉を使っているが、Tenbruck の場合にはそこから『理念の Dynamik』という言葉が生れた。ヴェーバーは種々なる価値領域の『固有の法則性』〔GARS I, S. 238. 大塚・生松訳三五頁〕という言葉を使っているが、Tenbruck は『固有の論理』という概念を用い、この概念を宗教に制限

し、そしてこの特別な固有の論理に合理化過程を生みだす Eigendynamik を与えている」(S. 119f.)。

Riesebrodt はヴェーバーにおいては「世界像」と「理念」との間に終始区別がなされていると主張する。「救済という理念の着想はそれ自体非常に古いものであった、……しかし救済が体系的-合理的な『世界像』とそれへの態度の表現であったところではじめて救済は特別な意義を獲得した」(GARS I, S. 252. 大塚・生松訳五七頁以下)。「諸理念を一つの世界像に制度化し、統合する場合の特殊なやり方が合理化過程の産物なのである。合理化過程への入口を見い出すのは担い手層の利害関心でありまた究極的価値である。この究極的価値はしかし専ら宗教的な由来のものというわけではない」(S. 120)。

「世界像の形に制度化された理念は純粋に宗教的な由来のものばかりではない。また宗教的な理念の特殊な鋳造には他の要素即ち経済的、政治的、等々の要素が強く協力している」(S. 120)。例として Riesebrodt は近東の神概念の成立に関するヴェーバーの叙述を挙げている(GARS I, S. 299. 木全訳二七頁参照)。

「経済的発展は内経済的並びに外経済的ファクターによってうながされる。西洋の宗教の発展にとって決定的に重要であったところの呪術並びに神秘的観想の後退の原因もまさしく部分的にのみ内宗教的な性質のものでありそして決して『宗教的な固有の論理』を起因とするものではない。『それには、西洋の宗教意識の、純粋に歴史的に制約された、独自な運命もまた作用した。すなわち、一方では社会的環境、なかんずく宗教意識の展開にとって決定的な役割をはたした社会層の側からの影響が、また他方では、それに劣らず、その宗教意識の生得の性格、つまり、現世超越的な神と、歴史的にその発展でイスラエルの預言と律法から規定をうけた救済の手段と方法の特殊性が、つよく影響している』(GARS I, S. 263. 大塚・生松訳七六頁)。ヴェーバーは生涯単一原因的説明に反対して、ここにみられ

るファクター相互依存という着想を主張した」それ故 Tenbruck の systematische These は「根本から間違っている」(S. 122)。

C ヴィンケルマンの批判

Winckelmann は Tenbruck の systhematische These を支えている werkgeschichtliche Hypothese の核を、Entzauberung の概念の発見の時期に関する仮説とみなしている。従ってこの仮説が誤りであることをはっきりと証明しようとする。

一九〇一～二年のローマ滞在。この滞在中の主要テーマの一つが修道院研究であったこと。この研究において世俗外的禁欲の世俗内的禁欲への転換が注目されていること。これはハイデルベルクへ帰えって後も継続され、「プロテスタンティズムの倫理」に仕上げられること（出版は一九〇四―五年）。またハイデルベルクへ帰えってまず着手されたのは「ため息の論文」〔「ロッシャーとクニース」のこと〕で、一九〇三年夏に最初の論理的―方法的な部分が書き上げられ、発表されたこと。この論文において著者はずっと以前から資本主義精神の発生との関連のなかでピュリタニズムの研究をしていたに違いないことが明らかとなること。トレルチ並びにゾンバルトと一緒のアメリカ旅行（出発一九〇四年八月）、この旅行の成果としてのゼクテ論文の発表。これらの過程のくわしい叙述の後、Winckelmann は続ける。「一九〇七―一九一〇年にヴェーバーのプロテスタンティズムの研究に対する批判並びに反批判が現われる。この関連でのヴェーバーの詳論から、彼はこの論文の続きを継続することを考えていたことが明らかとなる。一九〇八年に Archiv に『キリスト教会の社会理論』というトレルチの論文がシリーズの形であらわれはじめた。その結果必然的に、ヴェーバーはプロテスタンティズムの分析を継続せず、むしろ普遍的宗教社会学的研究にむかうこ

とを決心せざるをえなかった」(S. 14)。

「ついに一九一一―一九一三年に彼の普遍的-比較宗教社会学研究の成果を書き下すときが来た。WEWR に関する論文の『最初の部分』が友人の前で（第一次大戦前に）読まれた」(S.14) が、それがどの範囲までかは不明であるが、「ヒンズー教と仏教」、「古代ユダヤ教」は Archir に投稿するつど文章にされたのではないかと推定される。

Schluchter Riesebrodt にも指摘されている Logos 論文は本来は原「経済と社会」の論理的方法的部門であったが、原「経済と社会」がふくれあがりすぎたためにこの部門を、はずすことを余儀なくされたのである。この問題をめぐって出版社の Paul Siebeck にあてた手紙の日付が一九一〇年三月二六日と五月一日である。WG の宗教社会学の „entzaubert werden“ の表現が出てくる文章（WG[5] S. 308 武藤・薗田・薗田訳一六〇頁）も同じ時期のものと思われる。

更に彼の学問上の問題に関する私信が完全に公開されると、彼によって創りだされた理念の多くは一九一二年以前にさかのぼりうることが明らかとなるであろう。

以上の様な論旨によって、Entzauberungsprozeß の発見の時期を一九一五年としている Tenbruck の仮説が否定される。

次に、systhematische These に対する Winckelmann の批判に移ろう。

「ヴェーバーは古代ユダヤ教がその生活空間をとりかこみ、そして生活空間を部分的に貫いているところの呪術、未開文明並びに初期高度文明の呪術世界、をどの様にして合理的に克服したか、この（倫理的）合理性は、どの様なものであったか。この合理性はどこからはじまったかを直接資料にもとづいて詳細に提示した」(S. 25) のが「古代ユ

ダヤ教」である。「„Entzauberung“という言葉はどこにも述べられていない。ユダヤの宗教史が述べられているのではない。むしろ律法合理主義と合理的生活態度がどの様にして展開しまた拡大したかが資料にもとづいて証明されている。そしてどの様なそのつどの内部からの発展原動力――地理的、人種的、儀礼的、集落定住的、民族秩序的、経済的、政治的、等々の性格の――と可変的ファクターとしてのどの様な外部からの作用とが古イスラエルの歴史、社会、経済、宗教に詳細に及ぶまで影響を及ぼしたか、ということが具体的に叙述されている。『宗教の固有運動』についてはとりあげられていない。写実的―歴史的考察のためにも、社会学的考察のためにも、ユダヤ史の内因的考察 eine endogene Betrachtung〔ヴェルハウゼン〕と外因的考察 eine epigenetische Betrachtung〔エドウアルト・マイヤー〕の間の彼の時代の生々しい論争がヴェーバーによって批判されている。(1)宗教的な Entzauberungsprozeß は『内的論理の強制』によって成立した。(2)歴史と社会のなかでの宗教は一つの宗教的『合理的な固有の論理』に強制的に従っている。(3)『宗教が従う合理的 Zwang』の発見は『現実性の認識的研究とは何の関わりもない』。Tenbruck によるこれらの仮説は……ヴェーバーにとっては pure Phantasterei に思えたであろう」(S.25)。

宗教的なるものは社会学的観点からみるとき、自律的な固有の領域を決して形成せず、つねに社会的合同劇 das gesellschaftliche Ensemble のまっただ中にはめこまれている。それ故社会生活の一部であり、社会学的分析にとっては、相互に依存しあったファクターのなかの一つであるにすぎない。更に歴史の過程に影響を及ぼすのは人間であって、〔理念の様な〕無名の力 anonyme Kraft ではない。

理念は人間という担い手によって社会的な影響力をもつ実在的な力に達しなければ、理念は普遍史的にも社会学的にも無意味のままである。実在的な力に達したときにはじめて社会科学の地平での「認識対象」となるのである。

「世界像」についてのWinckelmannのくわしい叙述をここでとりあげることはできない。「転轍手」という表現についての彼の解釈だけにとどめておこう。

この表現によってヴェーバーは自らを誤解の危険性にさらした。つまり「世界像」は（いわば「世界精神」の担い手として）精神と社会の発展過程の操車場で「転轍手」として自らを実証した、という風に誤って解釈されたのである。しかしあらゆる「概念実在主義」に対するヴェーバーの拒否的態度を思うとき、ヴェーバーは上記の様に理解したのではなかった。「転轍」という表現はヴェーバー時代の実験心理学に由来している。一度人間の心に押しわけ入った出来事は、あらかじめレールが敷かれているのと同じ様に、反復されるのがきわめて容易であるという経験的認識がかの表現となったのである。世界像は、持続的に教えこまれる場合はとくに、一定の社会に属する人たちのMentalität にきざみこまれる、ということを意味している。この人たちが行動しようとする場合、この人たちのMentalität が、「世界像」によってあらかじめ形成された表象世界に最も適合する道を指し示すのである。社会的行為は、ヴェーバーの用語の場合には、「世界像」へのある種の親和性を示すのが普通である。

Winckelmann は論文の最後で、ヴェーバーはシュタムラー批判において、「歴史は人類のもろもろの宗教的な態度決定と争いの経過以外のなにものでもない」[21]という様な単一原因的歴史観をきびしく拒否していることを指摘して、Tenbruck の systhematische These の様な考え方はヴェーバーからは出てこない、と結んでいる。

結び――テンブルック論文の意義

以上において Tenbruck 論文並びにそれに対する批判を紹介した。筆者には Tenbruck の立論はいささか強引すぎると思われる。しかし Tenbruck 論文は、ヴェーバーの死後約五十年を経てはじめて発見された GARS 所収論文改訂の事実、この事実を前提の一つにして大胆な解釈を試みたところにその意義をもっている。今日ドイツではヴェーバールネッサンスと言われる。ということはヴェーバー研究は長い間低調であったことを意味している。このドイツの低調なヴェーバー研究に刺激を与えた点に、Tenbruck 論文の意義がみとめられる。事実この論文は多くの大学の専攻コースで基本的テキストとして使われている。[22]

ところで GARS 所収論文の改訂の事実を発見した最初の人は安藤英治教授であるのは周知のところである。安藤教授は Tenbruck が発表する七年前の一九六八年に PE に関する克明な「改訂表」を、ひき続き「儒教と道教」の「改訂表」を発表された。[23] この改訂表に付くべき「本文(1)」をまず昨夏発表されている。[24] この「本文(1)」において、(1) Archiv の PE と GARS の PE を支える問題意識の相違が明らかにされ、(2) Archiv の PE においては第三章以下にゼクテ論文を書くことを意図していたことが明らかにされ、(3)改訂の動機が推察されている。また「本文(2)」が近々発表されるとのことである。

「ヴェーバーに関する研究は、かの巨大なまた謎に満ちた、そして忘れてはならないことであるが、しばしば急いでなされた、また未完成の業績を理解するために、長いそして辛苦に満ちた道をたどり、またしばしば回り道をして来た。或る箇所或いは他の箇所を理解するために、数十年間それにたずさわらなければならなかった、しかしテキストの地平において業績を解読する」[25] しか方法が残されていないと Tenbruck も述べている様に、安藤教授の様な基礎的作業から積み上げることが、ヴェーバーにおける未解決問題の解明の近道である様に思われる。

註

(1) Friedrich H. Tenbruck, Das Werk Max Webers, in : Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie〔以下 KZfSS と略す〕27. Jg. 1975, S. 663–702.

(2) Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, fünfte Auflage S. XXXII.

(3) Ibid. XXV

(4) Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik〔以下 Archiv と略す〕Bd. 20/21.

(5) R. Bendix, Max Weber's Sosiology Today, in : International Social Science Journal, 17 (1965).

(6) WG はヴェーバーが編集にあたっていた「社会経済学綱要」(Grundriß der Sozialökonomik) の Abteitung Ⅲ に収められることになっていた。

(7) Archiv Bd 41–46 にいくつにも分けて発表される。

(8) GARS I S. 206 岩波文庫訳下二五一頁以下

(9) 大塚・生松訳とはすずすず書房刊「マックス・ヴェーバー宗教社会学論選」のことである。

(10) Wolfgang Schluchter, Max Webers Gesellschaftsgeschichte, in : KZfSS, 30. Jg. 1978, S. 438–467.

(11) Stephen Kalberg, The Seach for Thematic Orientations in a Fragmented Oeuvre : The Discussion of Max Weber in Recent German Sociological Literature, Sociology, 13, 1979, p. 127–139.

(12) Johannes Winckelmann, Die Herkunft von Max Webers „Entzauberungs"-Konzeption. Zugleich ein Beitrag zu der Frage, wie gut wir das Werk Max Webers kennen können, in : KZfSS, 32. Jg. 1980, S. 12–53.

(13) Martin Riesebrodt, Ideen, Interessen, Rationalisierung : Kritische Anmerkungen zu F. H. Tenbrucks Interpretation des Werkes Max Webers, in : KZfSS, 32. Jg. 1980, S. 111–129.

(14) Schluchter はこのことを証するものとして、ヴェーバー自身が WEWR の「序論」の脚注で記した文章を引用している。「因みにいえば、これらの諸論文はまた《Grundriß der Sozialökonomik》叢書の一冊である WG と同時に発表され、そのなかの宗教社会学に関する一章を注釈し補足する(また、もちろん、多くの点についてその章から注釈をうける)ものとなるはずであった」(GARS I S. 237. 大塚・生松訳三三頁)

(15) 後に Winckelmann の批判のところで触れられるが、Grundriß der Sozialökonomik 叢書に収められる予定の原

稿がふくれあがりすぎたために、この原稿の束から論理的並びに方法的部分をきりはなし、これに多少の手を加えて、「理解社会学のいくつかのカテゴリーについて」というタイトルの下で、彼が共同編集者であった Logos の一九一三年の第三分冊に発表した。それの S. 258/9 に（林道義訳〔岩波文庫〕二二頁）使われている。

(16) Archiv Bd 41 (1916), S. 372.

(17) Schluchter, ibid. S. 460.「一つの厚い巻は原始キリスト教、タルムードユダヤ教、イスラム、オリエントキリスト教の叙述を含むことになっている。最終巻で西洋のキリスト教をとりあげる」。

(18) ヴェーバーの死後、まもなく出版された GARS III の Vorwort は妻マリアンネによるものであるが、「彼は古代ユダヤ教を詩篇とヨブ記の分析によって補充し、さらにタルムードユダヤ教について叙述するつもりであった。……次に、原始キリスト教とイスラムに関する論文によってこのシリーズを完結するつもりであったと思われる」。

(19) Schluchter に続いて翌年 Stephen Kalberg が論評を発表している〔注(11)参照〕が、彼は systhematische These だけを批判しており、werkgeschichtliche Hypothese と systhematische These の関係を十分に把えていない様に思われるので、彼の論評の紹介は省略したい。

(20) 本論文八四頁参照。

(21) Wissenschaftslehre³, S. 294.

(22) Stephen Kalberg, ibid. p. 127.

(23) 成蹊大学政治経済論集第一八巻第三、四合併号（昭和四三年十一月）に PE の「改訂表」、同大学経済学部論集第二巻一号に「儒教と道教」の「改訂表」が発表された。

(24)「思想」第六七四号、一九八〇年八月。

(25) Tenbruck, ibid. S. 663.